

スリランカの幼稚園と大学で話したこと

前田 惠學

目次

一、はじめに

二、スリランカの幼稚園で話したこと

三、スリランカのこと、その精神生活など

四、シュリー・ジャヤワルダナ大学にて

——九分十二分教の話——

五、コロンボ大学にて

——仏教が南北に分かれたわけ——

以上

ただ今ご紹介いただきました前田惠學でございます。高崎先生からも詳しくご紹介いただいて有難うございました。

私は昨年（平成十一年）スリランカへ参りました。今回は七度目になりますが、色々経験したところがありました。本日はそれについてお話し申し上げたいと存じます。幼稚園と二つの大学を回りました。それぞれ無関係みないですが、関係がないわけでもございません。落語に三題噺というのがございますが、そんなつもりでお聞きいただきたいと存じます。

#### 一、はじめに

実はスリランカから招待したいと言われ、聞いてみますと、名誉称号を贈りたいということでありました。折角のお話ですからお受けしましょうというわけで、出かけたのであります。

スリランカは世界で一番古く長い仏教の歴史をもつ国です。紀元前三世紀に中インドから直接仏教が伝わり、今日に至っています。インドでは十三世紀初頭に仏教が亡びてしまいました。現在はまた少しづつ復活はじめていますが、インドは比較の対象にしにくいのです。スリランカが世界最長の歴史をもつ国と言つてよいと存じます。

スリランカの仏教は、ビルマやタイの仏教と同じく上座仏教（Theravada Buddhism）と言われていますが、三派に分かれています。シヤム派・アマラプラ派とラーマンニャ派です。三派共に実は紀元前三世紀から連綿としてつづいてきたわけではありません。スリランカの仏教は、途中で何回か途切れかけました。スリランカでは、時に出家の教団が途切れたのですが在家の信者がいて、やがて出家の比丘教団が復興して、同じ上座仏教の伝統がつづいてきました。インドで仏教が滅びたのは、出家教団だけでなく信者もなくなって、あるのはヒンドゥー教徒ばかり

になったのです。そこで滅亡と言われます。ところがスリランカでは国王はじめ在家の信者の仏教徒がつづいていました。かれらの間に比丘教団を復興したいという気運が起こります。上座仏教の比丘教団は五名以上の比丘が集まれば教団が成立し、五名以下になるともはや教団とは言えなくなつて滅亡したことになります。これが戒律上のきまりです。スリランカには古くは比丘尼教団も存在していたのですが、ポロンナルワ時代に五名以下になつて滅亡しました。一度滅亡すると、もはや復興は出来ません。比丘教団も同じ状態になったのですが、幸いなことに、スリランカの比丘教団はそれ以前にビルマやタイ国へ移植していました。そこで今度は逆にそれらの各地から移植することが可能であつたのです。かくしてスリランカの比丘教団は、その伝統を継続することが可能となりました。その場合、最初にタイ国から移植して、これがシャム派と言われました。この派は移植に際してカーストの意識を持ち込み、ゴイガマ（農民階級）だけしか入団を認めません。そこで志あるゴイガマや他のカーストの人たちはビルマのアマプラから比丘教団を移植しましたが、ここでもカースト意識が働いて二〇以上の小支派から成るアマプラ派を結成しました。しかし仏教は釈尊以来平等をその立場とするわけですから、平等の理想を守ろうとする人たちが、ビルマのラーマンニャから教団を移植してラーマンニャ派を結成したわけです。スリランカの政府は、この三派を公平に扱つて公認しています。

私は以前にラーマンニャ派からすでに名誉称号 (Sasanasobhana Dhammappiya 教光法愛) をいただいていました。今回はアマプラ派から名誉称号 (Pariyativisarada Dhammadhaja 蔵通法幢) を贈りたいということでありました。世界各地から長老比丘 (スリランカー、イギリス人、ビルマー、タイ人) 学者 (日本二、私と橘堂正弘氏) と一大学 (ロシア) を選んで、名誉称号と仏舍利を贈られました。仏舍利のことは向こうへ行つて始めて知らされたのですが、たいへんな感激でありました。本当に心から名誉なことだと思いました。仏舍利はお金で買えるものではあ

りません。古くからスリランカで崇められ、大切に守られてきたものを分けていただいたもので、しかも個人でいただいたのであります。

この時のセレモニーは、コロンボのバンダーラナーヤカ元首相記念ホールで開かれました。バンダーラナーヤカは在職中不幸にも暗殺されました。そのあとシリマーボ夫人が首相・大統領を努め、今はその娘さんのクラマトゥンガ女史が大統領の職にあるわけです。式典には大統領が出席の予定でしたが、政情不安のため代理が出席されました。事実その後一週間ほどして爆弾が爆発、大統領は目に負傷されました。

スリランカでは、憲法上政府が仏教を強化するに手をかすことができることになっています。仏教教団の行事であります。大統領が公式に出席できるわけです。

## 二、スリランカの幼稚園で話したこと

右のセレモニーの様子は、テレビで流され、新聞にも報道されました。私の服装がスリランカの人には珍しかったようで、大きく放映されました。式が終ってホテルへ帰り、休んでいますと、夜中のことでありますが、電話がかかってきてました。先生の受賞の姿をテレビで見ました。急なことで申しわけないが、明日是非うちの幼稚園へ来て一言話をしてほしい。ということでありました。日本の方が援助して出来ている幼稚園で創立二〇年祭だとのことでした。すでに他に予定は立てていたのですが、私も行かなくてはいけないかなと思い、時間の都合をつけて、朝の9時半から幼稚園の行事に参加することにいたしました。

私は大学では講義をしていますが、幼稚園でお話したことは今まで一度もありませんでした。だいたい私の子供の頃——田舎で生まれたものですから、幼稚園がまだありませんでした。私は幼稚園を出ていないわけです。幼稚

園で何を話したらいいか、困ったなど、色々考えました。

翌日幼稚園へ行ってみますと、幼稚園の園舎も校庭もきれいに清掃されていて、二〇年間一生懸命にやってこられただけあって、仲々いい幼稚園のように見えました。園児の子供さんもみんなお揃いのきれいな服装をしていて、なかなかいい家庭の子供さんが集まっているように見えました。校庭の周囲には、父兄の方々が、子供さんを見守って大勢いられる。正面の壇上には、お坊さんを始め町の名士や役員の方々がたくさんいられる、というようなところでお話することになりました。ここへ来てまた何をお話してよいか考えてみました。

スリランカの国については、皆さまもいくらかは聞いていられると思いますが、インドの南の小さい島国です。インド大陸から少し離れてインド洋の中にある真珠のような島だと言われます。もとはイギリスの植民地で、インドの一部でした。戦後はインドから分離独立しました。独立の時、宗教をもつてその原理としました。インドはヒンドウ教、パキスタンはイスラムで、スリランカは仏教をもつて国を立てました。

スリランカは小さい国家ですが、その中には厄介な民族問題があります。北部から東部にかけて海岸部に少数民族のタミル人がいます。人口の七割以上を占めるシンハラ人は、国の中央部から南部にかけて農業を主な生業としています。タミル人はヒンドウ教、シンハラ人は仏教を奉じていますが、スリランカでは宗教を民族対立の中に持ち込むことを極力避けて、スリランカの政府は、この民族対立は仏教とヒンドウ教の宗教による対立ではないと明言しています。

シンハラとタミルの間には、民族の利害にからむ解決の困難な問題があります。例えば言語問題もその一つです。イギリスの植民地時代には英語を共通語としていたのですが、独立するとシンハラ語とタミル語の違いが表面化しました。

スリランカには、資源もなく、目立つた産業も多くはありません。紅茶やココナッツが知られている程度でしょう。名古屋のノリタケの技術を取り入れて陶器の生産をしています。外国へ輸出できるほどの製品を作るには、まだ時間がかかるようです。その他、宝石が知られています。産出地ラトナプラは、文字通り宝の町という意味ですが、ここへ行きますと、米作りをしている水田のここかしこに囲いがあって、その中でザルで泥をすくうようにして、水にさらして採取しています。あまりにも簡単な方法に一驚するのですが、恐らく埋蔵量には限度があると思われる。資源もない産業も少ない国で、これから思うように発展することは難しく、維持していくだけでも大変のように思われます。

そんなわけで、幼稚園の園児が何を考え、どう生きていったらいいかを考えると、うっかりいい加減な気持ちではお話できない感じがしました。そして私は何よりもまず強く生きてもらいたいということが頭に浮かびました。身体も心も強くなることが大切です。日本では、時にまずやさしく思いやりのある人になれと言う人がいます。私には、これからの日本でもやはり強く正しくということが大切のように思います。スリランカでは、何よりもこれからの世界では強くないと生きていけない、強くなつて下さいと、スリランカの子供さんたちに訴えました。

強くなるといっても、いったい何に強いのか、どういう風に強いのか。中には喧嘩に強い子もあるかも知れません。かけつこに強い子もあるでしょう。また勉強に強い子もあるでしょう。どんな風に強いにしても、無暗に強いだけでは具合が悪いでしょう。よく言われるように思いやりがあり、慈しみの心があつて始めて本当の強いということになるでしょう。このことを私は第二にとりあげて申しました。

ただ思いやりの心があり、本当に強くても、これから生きていくには、様々な困難があります。困難にぶつかった時、釈尊はどのように仰ったか、私たちは仏教で何を教えているか、考えてみるべきでしょう。

釈尊は自ら「勝利者」であると言われました。勝利者はジナ (Jina) という言葉ですが、それは何よりも煩惱に打ち勝った者であるという意味においてでありました。人間の中には、数多くの欲望や煩惱がありますが、その煩惱に打ち勝った者が、眞の勝利者であると言われました。力が強くて勝ったとしても、それだけでは勝利者とは言えないのです。「負けるが勝ち」という諺もあります。ただ勝てばいいというわけではありません。負けたように見えても、じつと堪えて我慢して、最後の勝利に結びつくようにすることも必要でしょう。釈尊の教えを頭に浮べながら、スリランカの皆さんに強くなつて下さいと訴えました。

仏教の教えの中に忍辱にんにくという言葉があります。堪え忍ぶことです。修行する者にとって大切なことです。今日の日本の状況は、何か一寸気に入らないと、すぐ「キれる」と言われます。忍辱の精神が忘れられているのです。

さて実はもう一つ頼まれていた幼稚園がありました。名古屋で私の大学で学んだ上座仏教の留学僧が、在学中ローター・クラブの方々からお世話になっていました。見込まれて、帰国後自分の所属する寺に幼稚園を造る援助を受けました。私はその幼稚園建設に当り、定礎式に出席しました。今度は二度目でした。今回は丁度学芸会をするから出席して話をしてほしいということでした。園児に会うのは始めてです。ここでも私はほかに特別の考えもないまま「強い子になれ」というお話をしました。

### 三、スリランカのこと、その精神生活など

私は名古屋の生まれ。東京へ出て大学へ入る時には高崎先生たちと一緒に入学しましたが、昭和三七年、寺の住職をしていた父が死に、そのあと私が継承して名古屋へ戻り、住職の仕事をしながら名古屋の大学で講義をしてきました。

私が始めてスリランカへ参りましたのは昭和三六年で、その後スリランカから何人も日本へ来たいという希望者が出ました。約二〇年にわたり、一人二・三年づつスリランカから留学生を受け入れました。かれらはみんな日本語をマスターしてくれましたので、シンハラ語や英語を話さなくても、日本語で用が足りるようになりました。

うちに留学生がいますと、スリランカから日本を旅行してみたいという人が、次々に名古屋へ寄ってくれます。何日か泊ったりしますから、かれらはスリランカの新しい情報をうちへ置いていきます。居ながらにしてスリランカの動きがほとんど切れることなく分りました。私のところは日本の一つの拠点のようになり、そんな拠点が東京や大阪にもありますから、互いに横の連絡をとりながら旅行する人の便宜をはかることができました。スリランカへ調査や研究に参りましても、かれらが色々手伝ってくれて、仲間もふえ、実に楽しく成果を挙げることができました。

私がかうの寺へ留学生として受け入れたのは、比丘僧に限っていましたが、スリランカではお坊さんの地位が社会的に高いわけです。それにスリランカの国民も親日的でありまから、こんなことを聞いては悪いかなというようなことも聞くことが出来たりして、普通ではできないような調査ができたように思います。長い間にスリランカとの間にこうしたよい関係が集積していたわけです。

私が最初にスリランカへ参りましたのは前に述べたように昭和三六年（一九六一）、でありました。高崎先生は私より前にインドへ留学され、スリランカへお寄りになったそうであります。その頃、スリランカではペラデニアの国立セイロン大学が新国家の威信をかけて設立された一番立派な大学でありましたが、その他に仏教系で国立の大学が二つ、ヴィドゥヤーランカーラ（現ケラニア）大学とヴィディヨーダヤ（現シュリー・ジャヤワルダナ）大学がありました。当時はこの三大学が国立の大学として鼎立していました。その後現在までに各地に大学が出来て、



私のところで勉強した人たちも、今あちこちの大学で教えています。

私はスリランカへ参りまして生きた仏教の姿を調査研究する必要を強く感じました。私たちは海外の仏教については、知らないことばかりです。幸いに多くの知友を得たわけですから国際的かつ学際的な研究組織をこしらえて生きた現代スリランカの仏教を解明したいと考えました。一人では総合的な調査をすることが困難です。現地の大学の研究者にも参加してもらい、文部省など日本で研究費を獲得して本格的な現地調査に取り組みました。

日本の仏教学は過去の経論の研究には力を尽してきましたが、現代仏教の研究には、まだ手をつけていませんでした。過去の仏教の研究は文献資料による研究が中心ですが、現在の仏教の研究は、現地調査が中心です。研究方法が異なるわけです。

私は現代仏教を明らかにするのに、二つの柱を立てました。一つは仏教の存在形態、今一つは現代に対する仏教の対応です。二つ目は例えば、脳死・臓器移植の問題に対して、仏教はどのように考え、どう働きかけるかということ を明らかにするものです。ここでは第一の存在形態について具体的にお話しましょう。例えば、ある村にお寺があるとします。まず村の中のどんな位置に寺が置かれているか図面化します。そして寺の図面を書いてみます。まず、寺の土地の形と面積、それに門がありましょう。中に入ると正面に仏堂があつたりします。その外観を見て、中に入り、お堂の中の釈尊像や他の尊像について調べます。壁画なども詳しく見るべきです。仏堂の隣りには高くそびえる仏塔があります。仏塔は仏舍利をお祀りする建造物です。そのまた横など境内のどこかに菩提樹があります。菩提樹はその木の下で釈尊が悟りを開かれたから、釈尊に礼拝する心で菩提樹を拜むわけです。スリランカではこの仏堂と仏塔と菩提樹の三か所がいずれも釈尊を礼拝する場所になっています。

このうち、菩提樹は日本にありません。熱帯樹ですので、日本のような寒い国では育たないわけです。日本で昔

からぼだいじゅと言っているのはしなのき科で、ほんとうの菩提樹はくわ科で全くの別種です。ドイツ・ベルリンのリンデンバウムも西洋ぼだい樹として有名ですが、これも違います。

インドで釈尊が悟りを開かれた菩提樹の南へ延びた一枝をいただいて紀元前三世紀にサンガミッター尼がスリランカへ移植しました。

スリランカへ仏教を始めて伝えたのは、マヒンダ比丘と言われますが、サンガミッター尼はその妹で、尼僧団をスリランカへ伝えました。菩提樹は温度の高い処では強く、大木になります。実をつけ、実から芽を出すことも出来ませんが、差し木も出来ます。常緑樹ですが、日本では寒くなると葉が落ちてしまい、翌年初夏の頃まで、次の葉を出す力がなくなってしまうです。鉢植えにして温室にでも入れるほかありません。大木に出来ないわけです。サンガミッター尼の将来した菩提樹は、今もその古株から一枝を出し、生き残り、葉をつけて、スリランカではたいへんな尊敬を受けています。古い都アヌラダプラの遺蹟にある菩提樹の寺のご本尊で、寺の境内には株を分けたたくさんの菩提樹が植えられています。スリランカの寺では新しいお寺が出来れば、菩提樹が必要です。この寺から若い株をいただいて大切に育てるのです。この菩提樹は釈尊の身代りとして礼拝する聖木ですから、仏さまをお迎えすると同様に、盛大な奉迎式をするのが普通です。

このようにスリランカには菩提樹信仰がありますから、自然に生えた菩提樹の大木が見つかったりすると、早速にその回りにお寺が出来たりすることがあります。ペラデニヤやカルタラには、そうした菩提樹で有名な名所があります。コロンボからバスでゴールに向いますと、途中カルタラで車が停って、運転手さんが車から降りていきます。何か事故でもあったかなと思って見ていると、菩提樹の大木があつて、そこで拝んでからまた出発するという具合であります。乗客もそれを当然のように見えています。これでバス旅行が安全と思っているのかも知れません。

周囲には立派な展望台のある塔やお寺が来ています。

ペラデニヤの場合は、その昔洪水があつたそうです。ところが水の被害を免れた地域がありました。そこへ行つてみると立派な菩提樹がありました。早速にお寺が建設されたというわけです。ここでも車が停まります。カルタラもペラデニヤも、年々お寺が立派になつていくようです。

とにかく菩提樹は、乾燥にも強く大木になりますが、寒さに弱いので、日本では残念乍ら育ちません。私のうちの庭には、スリランカから齎された菩提樹がありますが、最低気温が一五度ほどになると鉢植えにして、温室に入れています。彼岸すぎに温かくなると、地面に植えかえます。差し木はできますが、大きく出来ないので残念です。

ところでスリランカでは、仏殿・仏塔・菩提樹を回つて礼拝すると、我が身に功德（ブンニヤ）がいただけると思います。この功德は目に見えないものです。どこに功德があるかと言われても説明のしようがありません。しかしとにかく拝めば功德が自分の身にそなわるのです。それでどうなるかというところ——人々は皆幸わせを願っています。身にそなわつた功德は幸せにつながるものでありましようが、よく目に見えないことが多いわけです。多くの人は直接に現世利益を得たいと考えています。そして現世利益のためには、別に神々にお祈りをいたします。仏の力ほどの神よりも大きく最高の地位にあるのですが、個々の現世の利益は神々にお祈りをするのです。例えば、病気が直りますように、お金を得たいとか、学業成績がよくなりますようにとか、具体的な個々のお願いは神々のところに行かなくてはなりません。

スリランカの寺院には、多くの場合、菩提樹の後ろあたりに神祠（デーヴァーレー）と言つて、神々を祀る祠があります。その神々には、ヴィシヌ・カタラガマ・フーヌヤン・サマン・ガネーシャ等、いかにもおどろおどろしい恐ろしい神々から柔和でやさしい神々まで、さまざまな神が祀られています。ただインドで広く信仰されているシ

バ神は、スリランカの仏教徒には余り親しまれていません。人々は何れかの神を自分の守り神として特別に深く信じているようです。

恐ろしい罰を与える神であっても、よくお仕えをし、神官にねんごろにご祈祷をしてもらいます。釈尊にお参りしてえた功德も、その時神に捧げて「回施」します。それによつて神が喜び、自分の願いを聞きとどけてくれると考えているようです。恐ろしい神であっても、いやそうであればあるほど、人々のどんな理不尽な願いでも適えてくれる頼もしい神となるようです。昔の日本には、人を呪つてあいつが早く死ぬようにしてほしいと、ワラ人形を釘で打ちつけて祈るようなことがありましたが、スリランカではそんな無理でも聞いてくれるのが粗野で恐ろしい神なのです。ただし人が見ているようなところでは、そんなお祈りはできません。淋しい山の中とか、海中の孤島のような形の神祠になるわけです。

一般に神祠は寺の中にあり、比丘僧の管理下に置かれています。また日本の鎮守にも似て、村の中にあることもあります。神祠でご祈祷するのは神官であつて、カプラーラと申します。カプラーラは結婚生活をし、世襲することが多いようです。寺の外に住んでいて、寺院内の神祠のご祈祷をします。村の神祠の場合、近くに住居を備えたりしています。

そんなわけで、スリランカの人々は、まず仏殿・仏塔・菩提樹に詣でて功德を積み、神祠にお参りして現世利益を祈るわけです。

#### 四、シュリー・ジャヤワルダナ大学にて —— 九分十二分教の話 ——

話が余所へそれてしまいましたが、スリランカの仏教と神祠の結びつきの実際についてお話を申しました。

さて本題に戻ります。今回の授賞式に出かける前、日本で国立シュリー・ジャヤワルダナ大学から話をして欲しいという依頼を受けていました。私は少し難しいかなとは思いましたが「釈尊説法の梗概要領と九分十二分教」というお話をいたしました。何故こんな題を選んだかと申しますと、一九六一年に私が始めてスリランカへ参りました時、ヴィディヤーランカーラ大学（今のケラニヤ大学）で会いました若い研究者が「九分教」を研究テーマとしていました。スリランカの研究者は、パーリ語聖典を資料にしていますが、それだけでは充分ではありません。漢訳の資料が沢山にあり、サンスクリットのものもいくらかあります。パーリ語聖典は九分教ですが、十二分教にしているのは、漢訳やサンスクリットの資料で、併せて比較しながら研究する必要があります。私は大学院の時、この両資料をつき合わせて研究していました。そんなわけで、スリランカで若い研究者がパーリ語聖典だけで九分教を研究しているのを見て、気の毒に思い、口幅つたいことを若い研究者に言った覚えがありました。その後、その方がどうなられたか、実は消息は聞いていないのですが、スリランカの人にこの問題を少しは知っておいて欲しい、という気持ちがありました。

九分教というのは、釈尊の教えが経典としてまとまる前の、一番古い形式です。その一番古い形式にあてはまる文章を現在我々の手許にある経典の中から引き出すことが出来れば、現在我々がもっている経典よりも古い段階の資料を取り出すことができます。それだけ釈尊の教えに近づくことができます。きちつと客観的な基準にもとづいて、古い資料を抽出し、釈尊に近づきたいということで、私は九分十二分教の問題を取りあげ研究してきました。少し専門的な話になってしまったので、スリランカの大学では、必ずしもよく理解していただけなかったようです。ここで皆さんに短い時間でお話して、分っていただけるかどうか、心許ない気がいたしますが、簡単にお話しておきたいと存じます。

釈尊の遺された言葉や言行録は、今日『阿含經』の中に多く残されています。『阿含經』というのは、単一の經典名ではなく、たくさんある經典を集めた叢書で、最初期の大藏經（經藏）と言うべきものです。その成り立ちはどうであつたか。――

まず釈尊が説法されます。それを聞いた人々がメモを取ります。当時はノートも筆記具もありませんでしたから、頭の中にまとめて記憶するわけです。当時の人の記憶力は今日の我々とは較べものにならないような、大変なものだつたと思われます。記憶が唯一の勉強の仕方でありますから、文字通り全身を耳にして教えを聞いていたであらうでしょう。それでも始めから終わりまで、釈尊の言葉を暗記することはできませんでしたでしょう。例えば、一時間説法されれば、一時間の内容が五行か十行くらいのメモになつたでしょう。これをかつて宇井伯壽博士は「説法の梗概要領」と呼ばれました。要するにメモです。

メモがメモとして各人の頭の中にある間は、ただのメモに過ぎません。このメモの文章を整え、公認された「仏所説如來所説の法」（仏が説かれ如來が説かれた教え）としての文体にまとめられた時、聖典としての權威をもつにいたりました。

この文体の一つとしてまず挙げられるのがスッタ（sutta）であつて「經」と訳しています。これは一般に伝えられている經典とは同じではありません。經典の中の經で、散文の素朴な形で説法の要点をまとめたものです。一般の經典の中のほんの一部を形成している古い核心の部分です。現在の『阿含經』には、最初に釈尊の教えを記録にとどめたスッタと言われる部分がある長い經典の中に埋まっているのです。そのスッタをどのようにして現在の經典（一部律藏を含みます）の中から見つけ出し、引き出すかということが大切です。例えば、たくさんある經典の中には、短いスッタの本分を分別し解釈する形式をもつ長い經典があります。この時、短い本文のスッタの部分、釈尊の

説法を最初にまとめたという可能性が高いわけです。このスッタを次の弟子に理解してもらいたいという時には、スッタの部分だけでなく、あとから加えられた解釈も一緒に暗記してもらおう、そしてその本文のスッタがいつ、どこで、誰に対して説かれたかをつけ加えます。解釈に当たっては、本文のこのの意味はこう、次の個所はこうと説明を加えます。そして經典の冒頭に「如是我聞」（このように私は聞きました）最後に、説法を聞いた人々が、「歡喜奉行」したというようにしめくくって、經典の一般的形式が出来上ります。

始めは短かいメモだけでした。それがだんだんに附加・増広されて長い現在の經典が出来上ります。これを經典の發達と申します。經典發達の經過を考え、釈尊の話されたのは、經典のどの部分かを探り、長い經典の中心核心を見つけ出すわけです。

次はゲイヤ (geyya) —— ゲイヤは同じような短い散文のスッタで書かれている本文があり、それを今度は韻律をふんだ詩の形、これをガーターと申しますが、そのガーターで今一度ほぼ同じ内容をくり返して説くので、これを重頌、重ねて頌する、つまり一度重ねて詩の形にして教えをまとめるわけです。重頌にはスッタとガーターの間に結合の文句があります。すなわち「釈尊はこのようにお説きになった。そして重ねて次のようにガーターで説明せられた」という内容の定り文句です。この短かいスッタとガーターの両部をワンセットにしてゲイヤと呼んでいます。ほぼ同じ内容をくり返すのは、記憶を確実にし、深く味わうためです。

第三はヴェイヤーカーナ (veyākaraṇa) です。これは問答体です。釈尊の説法があると、お弟子たちが質問をします。そこで問答体になります。問答の問いは弟子で、答の方が釈尊の言葉になります。問いにはパンハ (pañha) という言葉があり、答えはヴェイヤーカーナですが、問いよりも答えの方が大切ですからヴェイヤーカーナを採っています。つまり問答体なのです。

第四はガーター (gāthā) です。前にゲイヤのところで説明したガーターと同じですが、やはり韻律に従って書かれた詩の文章です。漢訳では偈とか伽陀とか音写しています。インドの人たちは詩の形にまとめることが、大変に好きでした。木陰など涼しい処に座って、静かに瞑想しながら詩の形の文章を心から味わっていたのです。

長い時間くり返し釈尊の教えを反芻してお悟りを得たいと考えていたようです。インドを旅行した人はご存じだと思いますが、インドでは我々と時間の感覚が全く違います。時間を忘れてしまいます。そうした中で歌を詠むように学習するわけです。例えば

サッバパーパーサ アカラナム

クサラッサ ウパサンパダー

サチッタパリヨダパナム

エータム ブッダーナ サーサナム (法句經一八三偈)

(諸惡莫作 衆善奉行 自淨其意 是諸仏教——七仏通誡偈)

ゆっくりと腹の中に収まるように読みあげ、釈尊の教えを深く味わいました。

第五のウダーナ (udāna) も、ガーターと同じように韻律に従って書かれた詩の形です。ただ釈尊が何か特に感興とか感懷をもよおされた時に作られた歌すなわちウダーナであると、定まり文句がついているので、ガーターと見分けることが出来ます。

こんな風にして仏教最古の經典の形式が出来始めます。以上の五つの形式がまず第一段として出来ました。次にまた第二段として四つの形式が出来て、九分教となるのです。すなわち、

第六にイティヴッタカ (itivuttaka 如是語)



第七にジャータカ (jātaka 本生話)

第八にヴェーダッラ (vedalla 教理問答)

第九にアッブタダンマ (abbhutadhamma 未曾有法)

です。南方上座仏教の人たちはこの九分教の名を知っているわけですが、その内容について必ずしもよく分っていないと思われます。それに北方仏教ではこの上さらに三分を加えて十二分教としています。そうしたお話をしたわけでした。

第一〇にニダーナ (nidāna 因縁物語)

第一一にアヴァダーナ (avadāna 過去世物語)

第一二にウパデーシャ (upadeśa 義釈)

となります。

シュリー・ジャヤワルダナ大学では、このような先生や学生さんたちに、釈尊の説法が最初に九分十二分教という形式にまとめられたというお話をしたわけです。しかしスリランカでは、パーリ語聖典のことしか頭にないものですから、サンスクリットや漢訳のテキストのことを申ししても、仲々理解しにくかったような印象でありました。

五、コロンボ大学にて——仏教が南北に分かれたわけ——

そうこうしている間に、もう一つ他の大学から講演に来てくれないかという依頼を受けました。コロンボ大学です。ここには以前、仏教学科はなかったのですが、最近新設されました。ジャヤワルダナ大学とほぼ同じ一五〇人

位の先生と学生が集まって下さったと思います。ここでは、釈尊の教えが、どのように南北に分かれて伝えられたかのお話をしました。南方と北方でどんな違いがあるのか、入口のところだけですが、お話をしました。

釈尊が世に出られたのは、紀元前六―五世紀のことです。釈迦族の国王の家柄に生まれ、王子として青少年時代をすごし、結婚して一子を設けられました。しかし人間には悩みが尽きません。生まれ、年を取り、病気になる、死んでいかねばなりません。これはどんな王家に生まれても避けることができません。一度悩み始めたら、幸わせではなくってしまいます。これは人間共通の悩みで、昔も今も変りはありません。この悩みを解決するために王位・家族・財産など、すべてを捨てて修行の道に進まれたのです。二九歳出家修行の道に入りました。六年間苦行されたのですが、中でも一番つらい苦行は断食であったと思います。それを六年、悟りを得たのは三五歳の時でした。

苦行には仲間が必要です。五人の仲間が知られています。のちに釈尊の弟子となって五比丘と言われるようになります。断食の時などには、交代でお互いに見守るのです。途中で立てなくなるといけないからです。しかし釈尊は苦行をいくら行っても、さとりは得られないと知りました。そこで苦行を捨て五人の仲間と分れて一人で移動し、菩提樹の下において悟りを得ました。時に三五歳でした。現在金剛宝座と言われて、大きな石疊が置かれています。

悟りのあと、しばらく法樂を受用され、説法をどうするか躊躇されたりしますが、結局説法をする決意をされ、考えを回らせて五人の修行者（五比丘）に教えを説かれることになりました。かれらはベナレスの北方六マイルの鹿野苑にすることが分りました。鹿野苑への途中、ウパカという異教徒の修行者に遇われます。このウパカとの対話は、有名ですが、今はしばらく措きます。そして五比丘に会われて、最初の説法をされますが、その内容は「四諦八聖道」の教えとして知られています。四諦とは四つの眞理ということで、苦諦・集諦・滅諦・道諦を言います。

苦諦とは、「人生は苦であるということ、これを眞理と見る」のです。常識的には、人生には、苦もあれば楽もあると考えています。しかしこれは眞理とは言えない。本当に苦勞をなめないと人生は苦であるということが分らない。釈尊は人生は苦であるというところに出発点を置かれた。ここが分らないと、仏教の教えがよく分らないことになります。本当に苦を知った人に対して苦を乗り越えていく道が説かれているわけです。

苦の内容としては、四苦八苦として説明されています。四苦とは生老病死の四つの苦しみ。それに「愛別離苦」つまり愛しい人とも別れなければならない苦しみ、「怨憎会苦」つまりうらみにくんでいる人とも会わねばならぬ苦しみ、それに「求不得苦」つまり求めても次々と欲望がわいて満足できない苦しみ、それに八つ目として「五取蘊苦」つまり身体と心に執着するところから起る苦しみの八苦をもつて説明しています。四苦にあと四苦を加えて八苦になります。四苦八苦という言葉は日常用いているわけですが、それが釈尊に発しているということは忘れられています。仏教の教えが分らないとか無関心の人がふえているのは、世の中が便利になり、楽がふえて、苦もあるが楽がもっと多いと考える人がふえているからであると思われる。しかし人間として生まれた以上、四苦八苦を逃れる道はありません。このことは何千年前の昔も、またこれから後も変わりはないはずです。

苦諦の次は集諦です。集諦とは「この苦には必ず原因があります。これを眞理と見る」のです。集とは、いろいろな条件が集まって成立していること、つまり苦には原因があるということを眞理と見るのです。その原因は「渴愛」（あくなき欲望）であるとしています。

次の滅諦は「その原因である渴愛を滅すれば、苦もまたなくすることができる」とし、これが眞理である」というのです。苦を滅することができれば幸福である、と言ってよいでしょう。これが眞の幸福であつて、苦もあれば楽もあるという時の楽は、眞の幸福ではないということを知らねばなりません。

滅諦の次は道諦です。「苦を滅するには道がある、これを眞理と見る」のです。そしてこの道諦を八正道として説いています。八正道とは、正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定の八で、この八つの道を修めることによって、苦を滅し眞の幸せをうることができると説かれたのです。

詳しい内容をご説明する時間がなくなりましたが、この四諦八正道の教えを釈尊は最初説法以後かなり長くお説きになっていたに違いありません。このほかにも、いろいろの教えを合わせてお説きになっていましたが、この辺が釈尊の前期における教説の中心であつたと思われます。

それでは釈尊後半生の教えはどうなつていたのか。これを知る手がかりは、『大般涅槃經』にあります。「般」は完全なの意味で、釈尊が八〇歳で入滅されて完全な涅槃にお入りになる前後の数か月の記録が伝えられています。『涅槃經』には『阿含經』の中に数種の異本があり、大乘の『涅槃經』もあります。ここではパーリ語で書かれた『大般涅槃經』を考えますが、これは長い經典を凡そ三〇經程集めた『長部經典』の中に第二六經として収められています。この『長部經典』には多く戒定慧の三学の教えが説かれています。私は、戒定慧の三学、またはこれに解脱智見を加えた四法の教説が釈尊後半生の教えの中心であつたと考えています。つまり前半生の教えの中心は四諦八正道にあり、後半生のそれは戒定慧の三学か四法にありました。細かくその内容を点検すれば、基本的にはそれ程違つたことが言われているわけではありませんが、大きな違いは「戒」の有無にあると言つてよいでしょう。

戒というのは、時に「戒律」と二字熟して同じように思われていますが、戒は、例えば「殺生はしない」と自ら戒め、誓う意味のものです。律は「殺生してはいけない、もし殺生したら、教団から追放する」というように教団によって禁止され、罰則に触れるという意味になります。内容は同じ「不殺生」でありまして、自戒と他律の違いがあります。その原語も戒はシーラ (sīla)、律はヴィナヤ (vinaya) として区別されます。

最初説法で五比丘が釈尊の弟子となって始めて教団が成立した時、律の規則はまだ何も出来ていませんでした。しかし釈尊の晩年にはかなりたくさんの方の規則が出来ていたと思われます。その理由は、釈尊の教団が大きくなり、弟子の数がふえるにつれて、次第に修行者にふさわしくない行動をする人が出て、教団にとって都合の悪い行為をする人がふえてきたからでした。「随犯随制」と言つて、何か違反行為をした人が出ると、その都度新しく規則がつくられたのです。そんなわけで、釈尊晩年の頃には、一〇〇ないし一五〇個程度の規則が出来上つていたと思われます。

ここで戒律の大切なところだけ、お話をしておきたいと思います。

仏教では、仏教徒であれば、誰もが守るべき大切な戒として五戒をあげています。五戒とは、

- (1) 生きものを殺さないこと (不殺生)
  - (2) 与えられないものを取らないこと (不与取又は不偷盜)
  - (3) 夫婦以外の異性と交わらないこと (不邪淫、ただし比丘僧は不淫)
  - (4) 嘘をつかないこと (不妄語)
  - (5) 酒を飲まないこと (不飲酒) であつて、平素くり返し順守することが求められます。
- また特別の精進日 (月四回のポーヤデーなど) には、寺に籠つて八戒を守ります。
- (6) 装身具や香などを身につけない (不塗飾香鬘戒)
  - (7) 歌や踊りを見聞きしない (不歌舞觀聽戒)
  - (8) 広く高い寝台に寝ない (不坐高广大牀戒)

または十戒を守ります。

(9) 正午以後食事をしない (不非時食戒)

(10) 金銭財宝を蓄えない (不蓄金銀宝戒)

この十戒は、また見習僧や見習尼僧が平素守るべき戒律でもあります。現行の出家の比丘僧の場合は、戒律の数は二七戒に上っています。

こうしたたぐさんの戒律を守り、身を正すのが三学にいう戒学です。戒を守り外形を正すことがまず求められます。行動を正しくすればこころも正しくなる、上座仏教では、まず戒律を守ることが大切であるとします。その上で精神統一の瞑想の修行に努めます。これが定学です。

戒を守って身を正し、定にはげんで精神統一をすれば、そこに智慧が生じます。私たちが手を洗う時調度手と手をこすり合わせて汚れをとるように、戒と定に努めることによって、身も心も清まるわけです。そこに最高の智慧が生まれます。私たちが悟りを得た時には、煩惱から解脱できたという自覚が生まれます。それを解脱智見と申します。悟りを得た時は、自分ではつきり分るとされています。釈尊の時代には、悟りを得て阿羅漢となった弟子がたくさん出ました。しかしいつの頃からか戒律の規定ができて、自分が悟りを得たということは、他の人に言っはいけないことになっています。それは教団や在家信者の中に無用の混乱が生ずることを避けるためです。そんなわけで、悟りを得たかどうか、外部からは仲々判断が難しいのですが、ビルマやバンクラデシュには、悟りを得たとみんなが認め、阿羅漢と考えられている人が現にいられます。

さて釈尊の前半生と後半生の教説の違いは戒にあります。これが、仏教の教えが、南へ伝わったのと北へ伝わったのとで、性格が違ってきた原因となったと、私は考えています。インドから北、西域を経て中国・韓国・日本へ

伝わった北伝仏教のひろがった地域では、インドのような熱い南方の地域とは風土が違います。先程申しました菩提樹のような木も育ちません。南方ではよく生育する菩提樹が北では育たないように、南方では守り易い戒律でも、北の方ではなかなか守りにいく規定があります。例えば、着用している衣も、寒い国には具合が悪いのです。南方の国々では、戒律が守り易く、戒定慧の教えが南方にひろく弘まります。北方へは戒が含まれていない四諦八正道の教えが、弘まりました。このように南方と北方に仏教が分れて弘まりました。

南方は戒を守るのですから、人間の行動を正す形からまず入るわけです。形すなわち人間の行動を正しくすれば、心もまた正しくなる、北方では、日本でよく考えられているようにまず心を正せ、心を正しくすれば外側の行動も正しくなると考えます。最終の結果は同じになるのですが、入口が違うわけです。この違いが南と北の違いを生み出していると思われれます。

南方では、戒定慧の教えを基本にした立派な論書が出ています。代表的なのは、五世紀に出たブッダゴーサ（仏音）の『清浄道論』です。清浄道論は瞑想修行による清浄への道を説いています。清浄とは、人間の汚れた煩惱を次第に断じて悟りを得ることです。瞑想修行の方法を具体的に詳しく論じて、南方仏教の教えの大綱を明らかにしています。

北方では、四諦説を骨組としたハリヴァルマンの『成実論』やヴァスヴァルマン作という『四諦論』があります。日本では明治以後原始仏教の研究書や解説書や釈尊の教えをまとめるのに、四諦八正道を骨格とするものが出ました。姉崎正治『根本仏教』や木村泰賢『原始仏教思想論』などにこれが見られます。

そんなわけで、南へ北へと仏教が弘がる中で、釈尊の教えを自分たちに適用し易いように展開させてきたわけがあります。

以上がコロンボ大学で私がお話した大要であります。時間がすでに超過しています。これ位で終りたいと思います。ご静聴有難うございました。